

中野の街をもっと好きになる「中野区検定」

中野区ものしり博士になったのは確か2018年のこと。前年11月に開催された第4回検定を受け、認定された。その時の喜びはひとしおだった。その前年の受験では惜しくも博士を逃しており、悔しさをバネに1年間猛勉強し、見事翌年、博士の称号を手にした。教育振興会から茶封筒が届いた時はドキドキした。合格通知を見た時の喜びは忘れない。

授与式には夫と共に参加した。試験や資格とは無縁の人生を送ってきた私にとって、自分の力で勝ち取った名誉というのをさまざま実感したのは初めてだったかもしれない。自分を褒めてあげたいと思った。その喜びが表にも出ていたのだろう、後日、夫が撮影した写真を振り返ると、終始顔がにやけている。心の底から嬉しい時間だった。

中野区検定は、大人になって自分の意思で初めて挑んだ資格試験だ。それも、とる必要性のない資格である。区外に勤務する身としては仕事の役には立たない。それでも、丸の内線に揺られながら毎朝、歴史民俗資料館で購入した小冊子を開いて「1と5のお囲いが中野駅の南側で、残りの2から4が北側、区役所のほうね、ふむふむ…」などと言いながら、知識を詰め込んでいたのである。そう、中野区検定は想像以上に難しい。区役所周辺に江戸の昔、生類憐れみの令を出した徳川綱吉が設けた犬の養育場、いわゆる「お囲い」が存在したことは当たり前の知識、その詳細までが求められるのである。

しかし話のタネにはなる。例えばFacebookのプロフィールに「中野区ものしり博士」と入れておくと「あれって何ですか？」と稀に突っ込んでもらえることがある。転職活動では履歴書に記載しておくといい。面接の自己紹介中にさりげなく触れると場を和ませる効果がある。そんな実利はいくつかあれど、何と言っても「我こそは、中野区ものしり博士、エッヘン」という自負の念が自信と活力を与えてくれる。散歩していても「ここで太田道灌が戦って人がいっぱい死んだのね」などと、その地に積み重なる歴史に思いを馳せることができる。

歴史の小ネタばかりを挟んでいるが、中野区検定は地理や現代史、はたまた文化風俗の知識までもが求められる。区民であれば必ず家庭に届く中野区報、これがまさに宝の山。受験するなら捨てずに熟読するといい。

さて、今では中野に住処を落ち着かせて早8年。縁もゆかりもない私が中野を好きになり、これからも住み続けたいと思えるのは、中野区検定のおかげと言える。中野を学び、その地を訪れ、見て触れて食べて話して、中野と自分の繋がりを深めていく。そんなきっかけを与えてくれたのが中野区検定だ。普段、区内の地域活動に接する機会のない私のような移住者が、受けて知って、自らの暮らしを豊かにしていく、そんなポテンシャルを秘めている取り組みだと思う。だからこそ、もうちょっと難易度が下がってもいいかな…。